＜研究ノート＞

音を描く実践研究

A Study of the Practical of “Drawing Sound”

林　浩子　HAYASHI Hiroko　木村　奈々　KIMURA Nana
北野　玄二　KITANO Genji　山本　淳子　YAMAMOTO Atsuko
箕輪　基実　MINOWA Motomi　高久　結衣　TAKAKU Yui
関　恵理子　SEKI Eriko　末永　仁美　SUENAGA Hitomi
行田　玲美　KOUDA Remi　山口　敏亮　YAMAGUCHI Toshiaki

本研究は、国立音楽大学附属幼稚園の教師による実践研究である。附属幼稚園の５歳児が２つの打楽器ワークショップに参加し、音を描くことでどのような表現が生まれていくのか、また、そこで幼児はどのような経験をしたのかを探求した。ワークショップのビデオ記録および、音を意識化していく視点と、表現の特徴と幼児の言葉に着目して分析を行った。その結果、音を描くことは、幼児の言葉、身体、音への意識を統合させ、相互に関わりながら身体の諸感覚を研ぎ覚ませていった。音を可視化し、さらに言葉に変換していくことは、幼児の見えないものを捉える感覚と思考を培っていくことが見出された。

キーワード：幼児、表現、音の可視化、実践

１．はじめに

幼稚園教育要領（2018）の領域「表現」に、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と記されている。幼児は、感じたり考えたりしたことを率直に表現する。身振りや動作、顔の表情、声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や言葉、線や形、色などを仲立ちにしたりして自分なりの方法で表現していく。それゆえ、幼児の表現を育てていくためには、言葉、身体、音楽、造形など、それぞれが分化した単独の手段や表現活動に限定するのではなく、それらを統合させた表現活動を総合的に行っていくことが有効であろう。

例えば、園庭の木の葉がひらひら回りながら散る様子を見た幼児が、「くるくる」や「ひらひら」などオノマトペを口にしながら、身体全体でその動きを真似た。その後、ウィンドチャイムの音を聴いて「葉っぱが散るみたい」と葉が散る様子と音を結びつけた。そして、ウィンドチャイムの音を聴いたり鳴らしたりしながら、自身が葉っぱになって動くことを伸びやかに楽しんだ。次の日、幼児は再び園庭の木の下で木を見上げ、葉や、葉が散る様子をじっと見つめた。別の日、「葉っぱが踊っているの」と言いながら、紙に鉛筆で描いた。実際に目で見た事象を身体で表現しながら体感したり、イメージとして捉え、音やそのイメージを線で描いたりした。そこでは、幼児は目に見えないものを見えるものへ可視化させている。

このように、幼児は対象や事象と関わり、表現する中で、表現の手段や方法を統合させ、見えるものから見えないものへ、反対に、見えないものから見えるものへと表現を変換させながら対象や事象をより深く知っていく。このような経験を積み重ねていくことが、感性を育てる大切な時期である幼児の諸感覚を鋭敏にし、幼児の知と創造性を高めていくと考える。

美術教育の視点から、音楽と造形を結び付けた実践について研究を行った初田・井上（2013）は、その事例を大正期にまでさかのぼり見出している。戦後の美術教育においても音楽と造形を結び付けた実践は見出され、とりわけ、「五感」や「感性」が強調されるようになった平成元年の改定以降の学習指導要領の中で、「音をかくこと」は注目されている。ところが、小学校以降の学校教育の中で目に見えないものを描くという捉えどころがな

く、活動の目的や方法が定まりにくく評価が困難なこの課題は、実際には実践されていないことを初田・井上は指摘している。そして、目に見えないものを視覚化して描くことこそ、造形学習としての今日的課題であると述べている。

一方、乳幼児教育では、先に述べたように、幼児自らが音楽と造形を結び付けて表現しているし、その研究も行われている。例えば、研究者が現場を訪れ、幼児にクラシック曲や幼児の歌を聴かせ絵を描くことで生まれる表現と、音楽が幼児の絵画表現に及ぼす内面的世界の諸傾向の特徴を示した研究（栗本・落合、2017）や、同じくクラシック曲を聴かせ、曲から受けた印象を色で表現することで幼児がより深く音楽を聴くことに効果があることを示した研究(嶋田､2007)がある。両者とも、オーケストラによる様々な楽器が織りなすリズム、メロディ、ハーモニーなどの音楽を聴きながら幼児が描いた絵を分析し、音楽と造形を結び付けることで幼児の感性や表現が高められていく有効性が示されている。しかし、幼児の表現の特徴である、言葉、身体、音楽、造形がどのように関わり表現の手段や方法を統合させているのか、そのための教師の援助の在り方については述べられていない。

そこで、本研究は音そのものに注目し、幼児が打楽器の音と出合い、その音を描くことを試みる。打楽器は、幼児が自分の手で叩いたり触れたりすることで容易に音の大きさ、高さ、音色を創り、変化させることができるとともに、その振動を身体で感じることができる。打楽器の音と出合い、その音を可視化するプロセスで、幼児の言葉、身体、音楽、造形などがどのように関わり合いながら表現されていくか、また、幼児がどんなことを経験していくのかを探求することが本研究の目的である。それは、幼児の表現を豊かにするための表現活動や教師の援助につながっていく。本研究は、国立音楽大学附属幼稚園の教師による実践研究である。ここから得られた知見は、幼児理解を深めるとともに、教師が自らの実践を振り返りながら新たな教育実践を再構築していくことを可能にする。

２．研究方法

国立音楽大学附属幼稚園の５歳児30名を対象に、２回の打楽器のワークショップを実施した。１回目は打楽器奏者の新谷祥子先生と一緒に幼児が打楽器の音と出合い、おしゃべりを楽しんだ。その６日後、今度はクラス担任が２回目のワークショップを行った。幼児が打楽器を選んで自由に音とのおしゃべりを楽しんだ後、その音を絵に描いた。それぞれの実施概要と内容を以下に記す。言葉、身体、音楽、造形など統合された表現活動において、言葉の明確化が期待される５歳児を研究対象とした。

なお、幼児が親しみやすいよう、文中では打楽器を太鼓と表すことがあるが、２つは同等の意味で使用する。

２－１. 打楽器ワークショップ（１）

実施日時：2020年２月14日、午前10時～ 10時35分

実施場所：幼稚園遊戯室

使用した楽器：キッズコンガ、キッズボンゴ、キッズジャンベ、キッズギャザリングドラム、キッズフロアタム、キッズトゥバーノ、フレームドラム、カホンなど(国立音楽大学演奏芸術センターから借用した)

実施内容：①「音と出合う：音は言葉」
生活の中から生まれた音や太鼓の成り立ちや意味を知り、色々な太鼓とのおしゃべりの仕方を知る。(17分)。

②「太鼓とおしゃべりをする」
友達や先生と一緒に色々な太鼓に触れ、音やリズムを楽しむ。(18分)。

分析方法：ワークショップ（１）のビデオ記録をもとに、新谷先生の言葉や投げかけと幼児の反応の双方向を記録にまとめ、言葉、身体、音がどのように関わり合いながら、幼児の中で音が意識化されていくかを

分析する。

写真１　「音と出合う」

写真２　「太鼓とおしゃべりする」

２－２．打楽器ワークショップ（２）

実施日時：2020年２月20日　９時30分～ 10時45分

実施場所：幼稚園遊戯室、年長保育室

使用した楽器：打楽器ワークショップ（１）で使用した打楽器に、スネアドラムと木琴を加えた。

準備物：四つ切り白画用紙、14色の絵具、絵具パレット、筆（太・中太・細）、水入れ

絵具は事前に溶いて準備し、幼児が自分の好きな絵具を選びパレットに入れ使用する。

実施内容：①「太鼓とおしゃべりをして、その音を持ち帰ろう」(10分)

２グループに分かれ、幼児自らが選択した打楽器とのおしゃべりを楽しむ。

②「音を描こう」(25分)

太鼓とおしゃべりをして持ち帰った音を絵具で表現する。

描く枚数は指定せず、幼児が描いた43枚の絵を分析対象とする。

分析方法：幼児が描いた作品から、音を可視化した表現の特徴と幼児の言葉に着目して分析する。なお、ワークショップ（２）で使用する色彩豊かな絵具は、デザインの専門家が準備した。幼児の表現と色彩の関係が予想されるが、本稿では幼児の線の表現のみを分析対象とする。

写真３　「太鼓とおしゃべりして、
その音を持ち帰ろう」

写真４　「音を描こう」
筆を揺らし絵具を散らして表現している

２－３．倫理的配慮

本研究の遂行にあたって、国立音楽大学研究倫理委員会に研究に関する申請を行い許可された（承認番号2005号)。また、新谷祥子先生にワークショップの一部掲載の許可を得た。幼児の言葉や作品は、個人が特定されな

いように配慮しアルファベットで記述する。

3．結果と考察

3－1．ワークショップ（1）

新谷先生の発言と投げかけにより、幼児は打楽器の音に集中していった。音や楽器の新たな見方や捉え方を得たことが、その後の打楽器との関わり方を変えた。ここでは、①「音と出合う：音は言葉」のはじまりの一部分を表1に抜粋して示す。

当日、遊戯室に様々な打楽器（2．研究方法参照）が並び、それを囲んで幼児が丸くなって座った。子どもたちは初めて見る楽器に目を見張った。

表1．ビデオ撮影からおこした記録（一部抜粋）

時間	新谷先生（A）の発言と投げかけの概要	幼児の発言や反応
9:30	【石のおしゃべり】	・Aの手元を見つめ、耳を澄ませる。
	・2個の石をリズミカルに打ちながら幼児の前を歩く。	・Aを真似て自分の手を動かしたり、その音に驚いたり、音の面白さに身をよじって笑い出したりする。
	・「今のは何でしょうか？」	・「石！」「石だったよ！」
	・「河原に行って拾って来たの。水に打たれて平たくなった石、丸いのはこんな音はでないよ」	・「うちの近くにもあるよ」
場面1	・「石で何をしてたかしら？」	・「音を出してた」「こうやって！」と自分の手を動かす。
	・「音がいっぱい聞こえた？」	
	・「どうやってた？」	・「手をこうやってた」とAを真似る。
	・「よく見てくれたね」	・「音が変わった！」石の音をオノマトペで表現する幼児もいる。
	・「音が変わるのはしゃべっているようにしたいから」と言いながら再び石でリズミカルに色々な音を出す。	・興味津々の表情でAの手元を見つめ、耳を澄ます。「やってみたい！」
	・音を出す手や指の使い方を具体的に説明する。	
	・「こうするとおしゃべりさんになるね」と石で色々な音を出して幼児に聞かせる。	・Aの手指の動きを凝視し、真似し始める ・「やってみた～い」
～～	～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～	～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
9:35	【太鼓のおしゃべり】	
	・「今日は太鼓を使っておしゃべりするよ」とドゥムドゥムを肩にかけ様々に音を出しながら幼児の前を歩く。	・新しい楽器に注目する。 ・音を面白がる。
場面2	・「これはトーキング太鼓＝おしゃべり太鼓と言われているの。音を太鼓の名前にすることがあります。」	・Aの話を真剣な表情で聞く。
	・ドゥムドゥムの音を出しながら、「ほら、おしゃべりしているね。ピアノやバイオリンを弾くように音楽してない。なぜなら、音楽の前におしゃべりがあって、お話しをする言葉があったのね」	・ドゥムドゥムの音に聴き入る。 ・音に合わせて身体を揺らし始める幼児もいる。 ・「しゃべってるみたいだね」「おもしろい」

	・「これはなんで音が変わるの？」と再び音を出す	・Aの動きをじっくり見る。 「肘を動かしてる、押さえてる、腕を動かしてる」
	・「このロープがヒント」 ・「ロープをぎゅう〜っとしめると音がどうなる？」	・Aの動きを真似ながら「肘でロープをおさえると音が変わる」「高くなる！」
	・「そう！音が大きくなる—小さくなる」「音が高くなる—低くなる」	・不思議そうに見つめる幼児もいる。
	・「高くなるにはどうするか見てね？低くなるには？」と実際に音を出す。	・「ロープを強くすると高くなって、弱くすると低くなる」
	・「そうだね。これが、言葉を創るためにとっても大事なこと」「さっきの石と同じ」 ・「今日は“太鼓のお言葉”をしようね」	
〜〜	〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜	〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
9:40	【音や太鼓の成り立ち】 ・２つの太鼓の音を聴かせる。 ・「…先祖の皆は必ず何かの物真似をしようとしたの」と太鼓を叩く。「何を真似たかわかる？」	・「おならみたい」「面白〜い」と音の違いを面白がる。 ・「鐘」「お寺の鐘」「風」…
〜〜	〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜	〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
場面３	・「…水がない国では空から雨が降ってくれないかなと願っている人がいるの。そのとき、お祈りするのと同じようにこうやって音を…」と４つの音を出し、「水、土、火、風の音」と知らせる。 ・再度、４つの音を鳴らし「最後は何の音かわかる？」 ・「太鼓がはじめ音楽のために生まれたのではなく、火や水を求めたり…願いを込めたり自然が生きたところから打楽器が生まれてきたの。こういうことを知ると今日、太鼓のお言葉がきっとうまくいくと思うな」 ・違う音を出しながら、「…だんだん、生き物の真似をしていくの。そのものの音は出ないけど、それを真似ようとする…蝶々や象と話し…私たちは人間だけでないものと生活しているね…」	・音に集中していく。 ・音を出す時の手の動かし方の違いに注目する。 ・「風の音」 ・足を踏み鳴らしAと一緒に「土の音」を出す幼児もいる。

〈考察〉

見て、聴いて、真似ていく

幼児は、自分たちの身近にある石から色々な音が創られていくことを驚き、面白がった。場面１、２ともに、石やトーキング太鼓（ドゥムドゥム）の音を聴いて身体を揺らしたり、音をオノマトペで口にしたりして、耳で聴いた音を身体で体感し、言葉に変換させながら、それぞれの音や打ち方に関心を寄せていった。さらに、新谷先生が示す石を打ち合わせる手の動きや、ロープを緩めたり絞めたりすることで音が変化することを、目（視覚）と耳（聴覚）から気付き、手や腕など身体の動かし方を真似た。このように、幼児は目の前の新谷先生が示す動

きをよく見て、聴いて、身体で真似ていった。幼児とともにある、表現者として教師の存在が大きいことがうかがえる。

湧き上がってくる身体の動き

②「太鼓とおしゃべりをする」では、新谷先生が示した太鼓を叩く際の手の形、指や爪、手首、腕の動かし方を真似ることで、幼児は視覚、聴覚に加え、打楽器と手指の接触面の触覚や振動から音が変化することに気付いた。また、叩く際に言葉を添えて高低アクセントをつけると音やリズムが変化し、それに伴い、自分の膝を屈伸させたり（立って叩く幼児）、身体を左右に揺らしたり、手を大きく振りあげたりなど身体全体の動きが変化していった。それは、新谷先生の動きの真似ではなく、幼児自身が言葉、身体、音を統合させる中で、自分の内側から湧き上がる動きだった。音との出合いを通して、幼児自身が身体の諸感覚を研ぎ澄ませながら自分自身の身体に出合っていることがわかる。

太鼓との双方向の関わりへ

場面２で、新谷先生はドゥムドゥムの音を「おしゃべりしてる」、場面３では「太鼓のお言葉」と表した。幼児にとって、楽器は自分が打ったり叩いたりなど働きかけることで音が出ることが面白い。それゆえ、音を出すことだけに夢中になるのは、幼児と楽器の関わりの中でよく見られる。しかし、新谷先生から、音は太鼓の「おしゃべり」で、それが「太鼓のお言葉」だと聞いて、太鼓は親しみの対象となり、幼児と太鼓との関係は変わった。ただ一方的に自分が太鼓に働きかけて音を出すのではなく、自分が打つ、叩くことで生まれる太鼓の音＝言葉に耳を澄ませ、意識するようになった。それは、自分の思うままに太鼓を叩く一方向の関わりから、太鼓に心を寄せ、太鼓の言葉を聴こうとする双方向の関わりへと変わった。ワークショップの後も、幼児は「太鼓のお言葉」という表現を口にするようになった。

新たな音の見方や捉え方へ

場面３で、新谷先生が水、土、火、風などの自然物を太鼓の音で表すと、幼児はそれぞれの音に意識を集中させた。“水のような…”“風のような…”とイメージを膨らませることで、目に見える自然物と音を結び付け、その音を聴き分けた。「音楽の前におしゃべりがあって、言葉があった」「太鼓が音楽のために生まれたのではなく、願いや祈りを込め、人々の生活や自然の中から生まれた」という音や太鼓の成り立ちに幼児は真剣に耳を傾け、音や太鼓への認識を深めていった。それは、教師も同様だった。ワークショップ（１）のあと、「表現活動は音楽のためのものでなく、幼児の思いや願いを読み取っていくためのものだと改めて気づいた」「表現することの意味を考えさせられた」「音自体を幼児とともに楽しみ、味わっていきたい」という教師の気付きや感想が出された。新谷先生のワークショップを通して、教師自身も音楽や音と出合う意味を問い直した。

「音自体を幼児とともに楽しみ、味わっていく」とは、幼児が太鼓との言葉に耳を澄ませ、自分と太鼓との双方向の関係を築いていったように、教師も、幼児や幼児が音と関わる言葉に耳を傾け、応答し合う関係へと変化させていくことが必要である。そうなるとき、表現活動の援助の在り方が自ずと見えてくることを、新谷先生のワークショップ（１）から学ぶことができた。

３－２．ワークショップ（２）

①「太鼓とおしゃべりをし、その音を持ち帰ろう」

保育室で、担任教師は幼児に「今日は太鼓とおしゃべりするよ。お口のおしゃべりじゃないよ」と伝えた。その後は、保育室から遊戯室への移動の指示も言葉を発せず全てジェスチャーで表した。幼児はこれからの活動に期待をふくらませると同時に、見ること、感じることに神経を集中させていった。

ワークショップ（１）で使用した楽器と、新たに加えられたスネアドラム、木琴が遊戯室全体に置かれ、幼児は遊戯室前に位置する舞台階段に座った。まず、担任教師ともう一人の教師それぞれが打楽器に向き合い、丁寧

に音（言葉）を出す姿を幼児は興味津々に見つめ、耳を澄ませた。遊戯室は打楽器の音だけが響いた。音を聴いて目を見張る子、ぱっと表情が明るくなって笑い出す子、耳をふさいで笑い合う子、太鼓を叩く動きを始める子と幼児の反応は様々だった。教師は２グループに分かれ行う活動の流れもジェスチャーで示した。「太鼓とのおしゃべり」が始まっても、声を出す幼児は誰もいなかった。自分で好きな打楽器を選び、じっくりと集中して音（言葉）とおしゃべりを始めた。その間、教師は幼児の傍に行き、一緒に楽しんだり、違う叩き方（おしゃべりの仕方）を提示したりした。全ての楽器を触れる子もいれば、気になる３～４種類だけに触れる子もいた。次のグループに交代する際、担任教師が両手で音（言葉）を持ち上げるジェスチャーをして保育室の方向を指さすと、同様のジェスチャーで大事に音を抱えて保育室に戻る幼児も多くいた。教師がしたこの動きは、幼児に見えない音を可視化する助けになった。

②「音を描こう」

保育室に戻った幼児たちは、ここでも声を発することはなく集中して音（言葉）を絵具で表現した。分析対象の43枚の絵の中から10枚の作品の特徴やエピソード、幼児の言葉を記したのが表２である。また、幼児の表現の特徴を線の形状に着目し、まとめたものが表３である。

表２　音を絵で可視化し、さらに、言葉で表す

	作　　品	表現の特徴やエピソード	幼　児　の　言　葉
図1 Y男		遊戯室を動き回り、意欲的に色々な太鼓の言葉を聴いたＹ男は、波線、ジグザグ線、スパイラルなど様々な線や点、丸を様々な色で描いた。	「色々な音を持って帰ったよ」「太鼓はジリジリしたのもあったし、ビリビリしたのもあったよ。」（太鼓それぞれの音の違いを感じ取り、それを線で表している。）
図2 S男		４色の長い一筆書きの線を描いた。教師は音（太鼓の言葉）のつながりを表したものと予想したが、Ｓ男の言葉からその意味がわかった。	「これ（点々）が、ぼくの太鼓の音」「音の中を走ったんだよ」（遊戯室いっぱいに存在した音を流れで表現している。）
図3 Y男		たくさんの色で様々な線、点を画面いっぱいに描いた。 Ｙ男の言葉は面白い。	「もう音がいっぱいで、頭が破裂するかと思ったよ。そのくらい音がいっぱいだったっていうことを描きたかったんだ。頭が破裂する前に、遊戯室が壊れちゃうかもしれないけど」

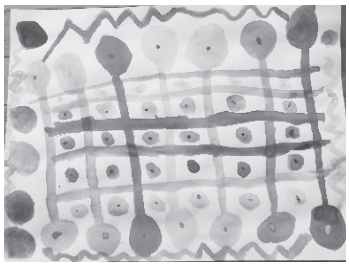
図4 H子		細い筆でスクリブルのような線を描いた。	H子は描いた後、何も言葉を発しなかったが、本当に楽しそうに、幸せそうな表情で黙々と絵を描き続け、6枚の絵を描いた。
図5－1 N子		たくさんの色を使って、画面いっぱいに点を描いた。	「これが、みんなの音なの」 （色を変えることで、一人一人の音の違いを表している。）
図5－2 N子		図5－1と同一人物 殆どの幼児が、音を線や点、丸で表したのに対して、五線譜とたくさんの色で音符を描いた。音楽＝音符と捉えている。	図5－1の「みんなの音なの」に対して、「こっちが私の音よ」自分の音を音符で表した子は、他にも4人いた。
図6 R男		図5－2と同様に、波線の中にアルファベットや音符、ハートなどの具体物を描いた。	「音大幼稚園の遊戯室からいっぱい音が飛び出していったんだよ」 「（その中で）英語の歌が聞こえたんだ」 打楽器の音に、英語の音を聞き取っている。
図7 K子		友達との関わりが難しいK子が木琴に興味を持ち同じ場で音を出す友達と目を合わせて笑ったり、言葉を交わしたりした。音とともに友達とつながったことも嬉しかったのかもしれない。	「この丸は楽器で、線は音と音がつながってるの」 穏やかな表情で、周りを気にせず集中して描いた。

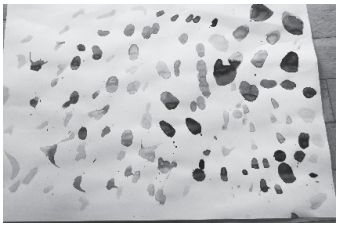
図8 I男	 	I男はみんなと一緒に動いたり、自分を表現したりすることは苦手で、特に絵は描こうとしなかった。しかし、ワークショップ（1）から明るい表情で意欲的に参加した。この日も自分から色々な打楽器に関わった。遊戯室から保育室に戻った時、担任教師が「音を持って帰って来た？」と尋ねると、両手をお皿にして大事そうに教師に見せた。暖色系の色の点と、寒色系の色の点で２枚の絵を描いた。描き終わった後、「絵具より太鼓の方が楽しかった」と言ったが、I男が抵抗なく絵を描いたことに教師は驚いた。

表３　幼児の表現の特徴

●線状	
直線	30%
波線	19%
ジグザグ線	２%
スパイラル	４%
ひと筆の長い線	19%
扇線	７%
交差する線	５%
●円状	
点	63%
丸	37%
スクリブル	５%
●具体的な形	
音符	23%
五線譜	７%
その他	12%

〈考察〉

感覚と思考を育てる保育を

幼児は、太鼓とおしゃべりをして感じた音を喜んで表現し、可視化させた。表２、図８のI男は絵を描くことが苦手で、それまで絵を描こうとしなかった。ところが、音の絵は抵抗なく描いたことに担任教師は驚いた。目に見えるものではなく、見えないものを描くには思考よりも感性を必要とする。I男は絵が描けなかったのではなく、これまでI男が描きたい、描けるテーマと出合えなかっただけなのかもしれない。単独の手段や表現方法に捉われず、言葉、身体、音楽、造形を統合させた表現活動を保育の中でいかに創っていくかは課題である。

一方で、言葉は思考を必要とする。表２に示したように、見えない音を可視化し、更に、言葉を添えることは、自分の表現を見直し、意味を付与していくことを通して、思考力や創造力など幼児の知を育んでいく。

見えないものを捉える感覚

①「太鼓とおしゃべりをして、その音を持ち帰ろう」で、教師はあえて言葉を発せず、終始ジェスチャーで表した。音と存分におしゃべりをした後、音を両手に抱えた教師のジェスチャーは、幼児の視覚、聴覚（打楽器の音への）、見えないものを捉える感覚を研ぎ澄ませた。ワークショップ（２）の当日、T子が穿いていたジーンズの膝についた絵具を指さし、「あ！音がついた」と言った。数日後、同じジーンズを穿いて登園したT子は、「先生、（ジーンズに）まだ、音がついてるの。大事な音だから、洗濯しないでってママにお願いしたんだ」と教師に伝えた。これらは幼児特有のアニミズムではなく、対象に心を寄せてその美しさ、面白さ、不思議さを味わう感性であり、幼児の知と創造性を高めていく根源となるものである。

音を可視化する表現の特徴

表３からは、見えない音を描いたときの幼児の表現の特徴が見出せる。分析対象の絵の63%が、打楽器の音を点で表していた。これは、叩く際の「ドンドン」の音やリズム、振動を表していると思われる。丸は太鼓の形

状であろう。様々な種類がみられたのが線であった。図１のＹ男は、音の違いを色々な線で表している。図２のＳ男は、ひと筆のつながった５色の線で描き、「音の中を走った」と言葉にした。遊戯室に響いた音とともに、音を肌で感じながらその中を走った感覚を表している。興味深かったのは、23％が音を音符で表していたことだった。音楽＝音符と記号として捉えていることがわかる。

幼児理解へ

先に図８のＩ男の変容を記したが、ワークショップを通して、教師はＩ男の新たな一面に気づいた。一つの表現にとどまらず、言葉、身体、音楽、造形を統合させた表現により、教師は幼児の表現の意味や内面世界を知り、作品をより深く味わうとともに幼児理解につながっていく。

４．おわりに

本研究は国立音楽大学附属幼稚園の教師による実践研究である。２回の打楽器ワークショップの実施、参加、分析を通して以下のことがわかった。

幼児が打楽器から出る音を言葉として捉え、打楽器と双方向の関係となることによって、幼児はその音に丁寧に耳を傾け、音を意識していった。そして、聴覚だけでなく、視覚、触覚など身体を通して音と出合うとき、幼児の内側から湧き上がる動きや音が生まれていった。このような幼児の気付きや学びが生まれるための教師の働きかけは重要である。新谷先生のワークショップから教師が多くのことを学ぶことができた。

音を絵に描くことは、幼児の言葉、身体、音への意識を統合させ相互に関わりながら身体の諸感覚を研ぎ覚ませていった。見えないものを可視化させ、さらに言葉に変換することは、幼児の感覚と思考を培っていく。また、見えないものを捉える感覚は、面白さや不思議さ、美しさに気づき、味わう感性を育てるとともに、幼児の知と創造性を高めていく源となる。教師はそれらを意識し、表現活動を創っていくことが求められる。

音を絵に描くことを通して、幼児一人一人の表現と変容を見ることができた。音楽のために表現活動をおこなうのではなく、表現活動を通して、一人一人や集団としての心の成長を願いたい。そのために、表現者として存在する教師の役割は大きい。言葉、身体、音楽、造形を統合した総合的な表現活動を保育の中にどう位置付け、構築していくか模索していくことが今後の課題である。

引用文献

栗本浩二、落合知美 2017「幼児期の子どもにおける音楽と絵画の関係性についての一考察」『小池学園研究紀要』No. 15、pp. 41-52.

嶋田由美 2007「音楽のイメージを色で表現する保育実践」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No. 17、pp. 93-100.

初田隆、井上明子 2013「音をかく活動の研究」『美術養育学』第34号、pp. 407-418.

文部科学省 2018『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p. 223.

謝辞

本研究にあたり、打楽器奏者で国立音楽大学非常勤講師であり、全国で幼児、児童向けの「リズムを学ぶ、楽しむワークショップ」を開催している新谷祥子先生にワークショップを開催していただきました。ワークショップの開催とともに記録および、写真の公開を承認くださったことに心から感謝いたします。